

## 深夜・食の味・小さい世界

華東師範大学 報道学院 施 柯沁



安倍夜郎先生の『深夜食堂』を評価してみようと試みたなら、私は幼時の祖母の家の醤油かけご飯を思い出します。その年に穫れた新米を選んで、農村特有の土のかまどでゆっくりと蒸かし、台所に白い霧が漂うまで待つと、米の香りがあふれ、待ちきれなくなって空の茶碗を差し出すと、祖母が雪のように白いご飯につやつやのラードを混ぜて何滴か醤油をたらしてくれました。黒々とした醤油がみずみずしく光る米粒の間にしみ込み、稲、薪、脂、発酵した醤油の香りがゆうゆうと混じって、最も簡単な食材を合わせただけなのに、好き嫌いが激しい愚かな私の味覚を虜にしまうのです。

新宿の裏道で開く深夜食堂は、営業時間が真夜中十二時から翌日七時。入ると何もかも見えてしまう店では小さい厨房が三面をカウンターに囲まれています。店主は中央でお客ひとりひとりに声を掛け、お客は頭を上げれば互いの顔が見えます。固定のメニューはなく、できるものだけ出して、店主は満足しています。

日本の美食に関係する本はたくさん読んだことがあります。北大路魯山人の『日本味道』、小川糸の『食堂かたつむりの料理』は美食家の食物と人生に関係する思考を述べていたり、個人が料理の中で体験した実際の生活の話の話を述べていたりしています。しかし『深夜食堂』は例外です。安倍夜郎先生は小さなコマの中で、食べ物を手がかりに日本の都市で暮らす特殊な人物を描いています。普通のサラリーマン、ヤクザのアニキ、こそ泥、ストリッパー……日の当たらない役回りの人々は、平々凡々としていて常人には軽蔑さえされますが、安倍先生は頑として、こうした私達が敢えて視線を背けている群れの生活を拡大してみせます。どうでもいい善悪もない、白飯のような最も簡単な線描に最も地道な悲喜愛憎で味をつけているのですが、山海の珍味と異なるまろやかでさまざまな味がするのです。

ある日本の大衆食堂についての記録映画では、取材を受けた人が「こういうところが好きなのは、いろいろな人がいて、いっしょにいると気楽だから」と話していました。『深夜食堂』はまさに一つ一つの出会いから構成されています。食べ物は実に優れた媒体で、さまざまな人が外在する身分、性別、年齢をしばらく放り出して共通の味覚だけを縁に知り合います。竜はヤクザのアニキで、小寿々はゲイバーの経営者ですが、タコさんウイナーと卵焼きを分け合ったことで、彼らの人生が交わります。竜はいつもタコさんウイナーを注文して小寿々を待っており、小寿々も竜と分け合うのを喜んでいました。竜が負傷して入院すると、小寿々はわざわざ好物のタコさんウイナーを贈っています。現代社会が秩序をもたらしたのと表裏で、都会の人は礼儀作法の維持と引き換えに人情を偽装せざるを得なくなっているのかもしれない。印象の中の日本は人と人との礼儀作法を強調する国で、きちんとした印象には敬服しますが、こうした習慣のせいで気づかない間に人の群れの感情の隔たりができるのではと心配でもあります。ですが深夜の小さい食堂に凝縮された、無条件で気兼ねのない交際と信頼関係には深く感動しました。一度会っただけで起こった不倫、中年「竹の子族」の青春の回想、女友達の間の情けと裏切り……まるで最も質素な食材をごった煮にしているいろいろな口当りを出したように、ほど良い距離感と好み合う同士めぐり会い。深夜食堂に集まる他人同士が文明社会の最も重視する外在をよそに腹を割って話し合い、尊敬し合って、酸い、甘い、苦い、渋いより多様な味をつけた生活は、些細ないざごさの中にあります。偶然にめぐり会った人が率直に気持ちを話すことを学んで、いっそう心から互いに向き合い、支え合いながら生活の逆境を抜ける、といった出会いは、もっと早く会いたかったというものではありません。感情というきつい酒を一気に飲み干せるというものでもなく、文明の後ろ姿の中のささやかな食事で、ほんの少しずつ味わって咀嚼するに値します。人間が最もよく知っていて最も忘れやすい世の中のいつまでも続く温情が、お客の一人一人をやさしくもてなすのです。

『深夜食堂』では個人の物語も綴られています。あるいは、一つ一つの出会いは実は個人の他人を介した自己観察だとも言えます。料理は人の心を反映すると言われます。生命に刻まれた本能により、人々は食事するとき自然と雑念を忘れ、味覚の感知に任せて、記憶の深い所にある最初の思い「お父さんの焼きそばが一番好き！」呼び起こすことができます。たとえ父親が借金取りを避けるため姿を隠して何年経っても、歌手の倫子は幼い頃に育ててくれた父の焼きそばの好みを覚えています。なじみの青のり焼きそばを口にしたとき、ついに自分の内心の深いところで父を慕う思いを避けられませんでした。ゆで卵が好きな毛利先生はずっと自分の頭がかつらであることを隠していました。勇気を奮い起こして彼女に打ち明けると振られてしまいましたが、最後には自分も見た目で人を判断することは避けられないのだと分かり、つるつる頭の自分を受け入れました。ぽっちゃりさんのまゆみちゃんは、最愛の牛すじ大根とダイエット計画の間で行ったり来たりしています。愛の女神は一向に構ってくれませんが、美味しいものを慰めに、本性に従って努力を続け……美食家が食材を掘り起こすことで生命の真の意味を追求しようと渴望するのを、高僧が修行に専念して道を求めるようだと喩えたとしたら、『深夜食堂』の小人物は騒がしい俗世から隠れ、自然な感情の動きの中で世の中のあれこれを味わう行者により近いでしょう。私は日本の文芸作品の中にあるこうしたこまごまとした日常が好きです。普通の人の心の底にある小さく確かな幸せや小さな悩みが日常の食事に反映されているのを見るのが好きです。社会の底辺にいる人たちが都市のキラキラしたうわべの下にある粗野な姿を見て、基本的な日常生活で言い争っていて、それでも傲慢でも卑屈でもなく、不平をこぼしながら、また気丈に次の朝を迎えて。彼らは大きい世界の街角で世に知られずに成長しながら、自分の小さい世界の中でかけがえのない主役になろうと努力しているのです。

安倍夜郎先生がずば抜けているのは簡明で面白い画風とすばらしさに満ちた展開だけではありません。誰もが壮大な事柄を物語を強調するなかで、敢えて大きい世界の中のとある微小な層を代表し、静かに彼らの歌を歌うところにすごさがあります。日本の現実文化に根ざしながら文学の固有の国境を越えた人本主義への配慮は、まるで寄り合い住宅の中で町内の人々の日常を丁寧な聞いていくかのようです。喜びと憂いとちよっぴりの同情を挟み、寂しさを訴える都市の個人が自分の小さい世界で名利を求めるとは別の精神を託す強さです。

日本を訪れる機会があったら、是非とも深夜食堂を見に行ってください。真夜中十二時にのれんが掛かる、にぎわいの背後で夜更けに感情を忘れ落ち着き先のない都会の人々の、狭いけれど最後の船着場です。

注: 読んだ本は『深夜食堂』 安倍夜郎[著]